

PISA に対するフランスの反応

池田 賢市(教育総研運営委員・中央大学)

1 PISA2003 までのフランスのスタンス (国民教育省による見解)

- ① PISA は、学習指導要領に直接結びついた評価ではない。たとえば、数学においては、フランスの学習指導要領の内容のおよそ40%は、PISAの調査では測られていない。PISAの目的は、学習指導要領の内容の達成度を測ることではなく、成長してからの生活に役立つ知識・技能を動員し使用する能力である。
- ② フランスにとってPISAは、フランスの15才の生徒のどこが「強い点」でどこが「弱い点」なのかを国際比較によって明らかにし、また、フランスの教育制度のある側面の検討を可能とするといったような、国内的な評価の補完的情報をもたらすものである。
- ③ フランスでは、PISAの対象となる15才の生徒たちは、同一の学校段階にいるというわけではない。したがって、この点を考慮せずに、生徒の学力と学校環境とを結びつけることには意味がない。そして、落第が、フランスの生徒たちの学力の偏差を最もよく説明する要因となっている。
- ④ フランスはOECDの平均に位置している。スコアが低い国は、OECDに加盟していない国である
- ⑤ 2000年に比べて2003年では、科学的リテラシーのスコアが若干上昇しているが、これは、PISAの試験内容が、フランスでの科学に関する試験のあり方と近いものであったためと思われる。

2 PISA2006 への反応 ール・モンド紙 (2007.12.05 ネット版)よりー <抄訳>

- ① OECDは、12月4日、57か国の15歳の学力水準を評価する3年ごとの調査結果を公表した。フランスの生徒は、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーともに平均以下に位置づいており、また、2003年の調査よりもいずれも下がった。今回は科学的リテラシーを中心とするものであったが、その科学においてフランスはOECD加盟国中、前回の10位から19位になった。前回のPISAの結果は、ドイツ、スイス、日本にショックを与えたが、今回はフランスの番かもしれない。
- ② この3年間、フランスは学力(performances scolaires)を向上させなかった。
読解力において、フランスは、2000年の14位から今回17位に後退した。数学的リテラシーにおいても同様のことが起こった。「フランスと日本は、読解力において後退しているが、その原因は正反対である。つまり、日本では優秀な生徒の割合が減っているのに対して、フランスは困難を抱えた生徒の割合が増えている」ことをOECD教育局のEric Charbonnier分析官は明らかにしている。

しかし、この違いは、両国を分ける唯一のものではない。ドイツやオーストリア、ある

いはスイスのように、日本は、いわゆる「PISA ショック」によって教育改革を実施した国に属している。「日本やスイスは、生徒に対する全国的な評価システムを実施するという反応を示した。またドイツで現在進行中のいくつかの改革は PISA に由来するものである」と、グルノーブル第Ⅱ大学の Nathalie Mons は説明している。ドイツでは、科学への興味を引き出すために、およそ 250 の「子ども実験室」が全国に創設された。また、午後まで子どもたちを引き受ける準備をしている。

③ フランスでは、PISA はそれほど深刻には受け取られていなかったが、この 2006 年の調査によって、事態は変わる可能性はある。しかし、今回のランクについては、まだ慎重を要する。「PISA は本当に改革をもたらすのだろうか。つまり、計画が先に存在していたのか、後驗的に研究に基づいて正当化されたのか」と大学人は疑っている。ここ数週間、教育相 Xavier Darcos は、国際的に参考になる資料を集めている。12月3日、Darcos は、「学校に学校を呼び戻す」ことを正当化するために、また、かれの将来的改革方針の一つである基礎知識の習得について初等教育を再結集する論陣を張るために、フランスの生徒の数学における悪い結果に言及した。

④ 15 歳の生徒に科学を好きにさせることは可能である。すべての小学校で、好奇心旺盛なその時期に、自ら作業をするようなスタイルの授業の実施が必要である。そこでは、子どもたちは、読み書きを習得すると同時に科学を学び、そして学問をするのである。懐疑的な人も、困難な地域での学校も含めてそれらのクラスを訪問してみるならば、納得するはずである。

コレッジにおいては、生徒たちの知性(intelligences)の多様性や想像力の働きを尊重することで、彼らは、科学を学ぶと同時にそれを行い、教科の枠の厳格さとは反対の一体性(unité)を理解し、自らの職業を選択することが可能となる。そこでは、学業失敗によって「進路指導される」のではなく、科学と技術とは両立するのである。

また、科学を好きにさせることは、教員の養成を通して可能である。教員は、あと 10 年の間に約半数は入れ替わる。これは、大学等の高等教育機関と同時に、科学・技術にかかわる企業の力にもよる。これらの機関が挑戦補するならば、20 年以内に、フランスの PISA でのスコアは変化するであろう。